

七〇～八〇年代の福島県双葉地方の反原発運動 —石丸小四郎さん(双葉地方原発反対同盟代表)に聞く②

Labor Now 脱原発ビデオ・プロジェクト

「Labor Now 脱原発ビデオ・プロジェクト」は二〇一一年七月、ビデオ『福島原発震災被災者の声をたどる旅』の制作過程で石丸小四郎さん(双葉地方原発反対同盟代表、当時六八歳)

に出会いインタビューした^③。石丸さんは、一九六五年から双葉地方で原発反対運動に参加し、原発稼働後は、被曝労働者の支援活動を行なつてきました。私たちは避難先のいわき市を訪ねて、主に七〇～八〇年代の双葉地方原発反対同盟の活動について聞いた。そこからは、かつての労働組合などを中心とする反原発運動の高揚と地方選挙への深い失望、その後のある政治家の転向、そして、さらに原発に依存していく様が浮き彫りになつた。本稿は二〇一二年八月二九日にいわき市の避難先の自宅で実施したインタビュー記録を再構成し、本人の確認を得たものである。なお、本プロジェクトは石丸さんを含む関係者へのインタビューを継続する予定である。

一 はじめに

1 富岡町から秋田、そしていわき市への避難
二〇一一年九月まで実家のある秋田にいました。しかし、廃炉や収束作業の労働者を支援するため、また汚染状況のなかで自分に何かできるのか、と自問するなかで、福島に帰ろうと決めました。福島市といわき市と郡山市の三つを避難先として考えましたが、いわき市は原發被曝労働の拠点なので、ここへ来ました。

運動をするうえで、福島の現状を最大限に掘り起こすことを心がけています。原発被害の状況を克明に記録し、全国の人々に伝えたくというバブル状態でした。人々は原発に夢を託していました。

しかし、いわき市の場合、ここも放射能の被害を受け、線量は事故前の二～三倍です。また、いわき市から県内・県外へ六〇〇〇人が避難をしています。収束作業の労働者が多数入つてい

のようないい発言があるのではないかと危惧をしていました。これまでも原発の被害を克明に世の中に伝えることが反対運動のポイントだと訴えてきましたので、事故後もそれを実践していくたいと思います。

2 いわき市の活況

双葉郡からいわき市に二万三〇〇〇人が避難しています。そのためここはバブル状態です。家の近くのスーパーはいつも混雑していて、ある郵便局員は、いわき市にこんなに避難者がいるとは思ひなかつたと言つていました。滞在も

ひどい。双葉郡といわき市の天候があまり変わらないので、会津に避難している人たちもいわき市に来たがっています。避難者のひとりとして、いわき市に迷惑をかけていると感じています。そうならないように、財政的な措置をきちんととしてほしいと思っています。

いわき市は原発事故以後、活況を呈していますが、一九八〇年前後の双葉郡のそれとは明らかに違います。双葉郡の一九七〇～八〇年代は電源三法交付金がばらまかれ、七万四〇〇〇人の人口のなかにプラント建設の労働者が入つてくるというバブル状態でした。人々は原発に夢を託していました。

しかし、いわき市の場合、ここも放射能の被害を受け、線量は事故前の二～三倍です。また、いわき市から県内・県外へ六〇〇〇人が避難をしています。収束作業の労働者が多数入つてい

て、ホテルや旅館などに泊まつて働きに出ています。活況のなかでも、原発事故の被害があるので、うかがっている状況ではありません。

二 反原発運動の高揚

1 原点は郵便局での労働運動

私の父は秋田で小さな郵便局の局長をしていました。まだ世襲の時代でした。私は、その郵便局を継がず、一九六四年に、双葉郡の郵便局に転勤し、妻の実家のある福島県双葉郡富岡町に移住しました。

ここで最初に直面した問題は、身体障がい者への差別です。当時、郵便局には障がい者が働いていました。戦争中から、戦争で障がいを負った人の働く場になっていたからです。その人たちの多くが差別を受けていました。^{読み書き}できる馬鹿はないのか、郵便局長は彼らのことをそんなふうに呼んでいた時代でした。

つぎに直面したのは、郵便局にバイクが導入されて、浜通りを中心に自律神経失調症で睡眠障害や突然死、腰痛や白蟻病が増えたことでした。バイクのナンバー・プレートがよく落ちるようになり、それでバイクに問題があるのではないかと私は疑いました。そこで、市販のバイクと、郵便局で使用していたバイクの双方を解体して比較したところ、郵便局のバイクが改良されていることに気づきました。エンジンから

メインシャフトの歯車が小さくなつていて、回転数が上がることで振動が強くなつていたのが原因でした。また当時は山坂を重い荷物を積んで走ります。それも舗装されていないガタガタの道です。白蟻病は自律神経がやられる病気です。とくに寒い季節になると血管が収縮して血液が送れなくなります。原因是バイクにあるとわかりました。

しかし、いくら労災申請をしてもすべて却下されました。公務員の場合は人事院に再審査請求をするのですが、一九七五年に労災を勝ち取ることができます。

2 岩本忠夫さんとの反原発運動

一九六四年に秋田から福島へ転居してからまもなくです。私が仕事で郵便局の窓口に居ると、岩本忠夫さんは社会党の機関誌『社会新報』を郵送するため郵便局へ来ていました。とても魅力的でバイタリティにあふれた人で、話をするうちに遊びに来いと誘われました。

彼とは原発の話が多かつたです。一九六四年当時は、福島第一原発の建設のうわさはありませんが、土地交渉でもめるようなことはありませんでした。潜在的な動きは相当にあつたと思えんでした。潜的な動きは相当にあつたと思えんでした。

当初岩本さんは、「憲法を守る双葉住民の会」の学習会で、平和運動の延長として原発問題に取り組んでいました。当時の岩本さんはリーダーとしてパワフルで、核と人間は共存できないと常に言っていました。私もそれに共感しました。彼は青年団のリーダーとして、青年団運動や歌声運動、地域の問題に関わっていました。そして社会党選出の双葉町会議員になります。各町に社会党から二人くらいの議員が出ていましたので、社会党双葉総支部の委員長でもありました。それに対して共産党はあまり目立ちませんでした。

3 総評労働運動の影響

当時の双葉郡の反原発運動の特徴は、今までの市民運動が発展する兆しはなく、労働組合

が発表されて、これはたいへんだと気づきました。私は富岡町に住んでいましたので、第二原発の建設予定地の地権者で結成された「毛薺地区原発反対規制同盟」の学習会に岩本さんと参加するようになりました。

第二原発は富岡町と楢葉町の二つの町をまたいで立地されることになりましたが、楢葉町に反対運動は起きませんでした。自民党の県会議員だった早川理久さんが楢葉町に土地をもつていたためです。しかし私たちは、なんら相談もなく建設されるのはおかしいと、勉強を始めました。その頃から高木仁三郎さんは富岡町に来ていましたと記憶しています。

と政党が中心でした。農民の運動は当初からあまり活発ではありませんでした。その理由として、原発誘致によって出稼ぎをしなくてよい、という期待が農民たちにあったように思いました。米価闘争や平和運動には積極的でしたが、反原発運動には迫力がありませんでした。また、漁民の運動も双葉郡に請戸漁協がありましたが、高額の漁業補償金が支払われて運動は消えてしまいました。

当時の総評労働運動は、職場と地域の問題に同じ目線で取り組むことをめざしていました。私たち、「双葉地方労働組合協議会」（双葉地方労）でそれを実践しました。これが反原発運動にも関わるきっかけです。

双葉地方労の主力は、三公社五現業、つまり国労、全通、全電通、全林野、全専売などと民間の人たちです。地域で解雇があると、皆で取り組みました。それと同じように原発は危険だということで、反原発運動にも取り組みました。一九七一年に第一原発の運転が開始されます。私たちは運転することで原発内に放射能が内包されると思つていました。人間の力で放射能を封じ込めることは不可能で、さらに健康に問題が出るだろうと。

そこで一九七二年八月に「双葉地方原発反対同盟」（結成時の名称は「相双地方原発反対同盟」）を結成しました。その主力は、社会党と双葉地方労、全日本農民組合などの社会党総評ブロックでした。これらの団体は地域の労働

や公害におけるあらゆる問題に関わっていました。

第二原発建設をめぐって公開ヒアリングが行なわれたのは一九七三年九月でした。そこに参加すべきか否かという位置付けをめぐって論争がありました。公開ヒアリングは本来の公聴会ではなく、建設のためのセレモニーで「ごまかし公聴会」として、私たちは阻止闘争に取り組みました。一方、共産党系の人たちは公聴会に参加して自分たちの主張をすべきだと言いました。

公開ヒアリングは本来、双葉郡で開催されるべきでしたが、当時は運動に力があつたために国がまずいと判断して、福島市で行なわれるようになりました。福島県労働組合協議会の人たちが中心になつて、デモや会場前のピケなどで激しく抵抗し、機動隊ともぶつかりました。

この運動がいまも継続されていたら、福島原発事故も、日本全国に原発が六二基（建設中・閉鎖も含む）も建設されることとなかつたと、今でも強く思っています。

そのうちに原発建設に従事した農民たちや、石炭から石油へというエネルギー転換によつていわき常磐炭鉱を解雇になつた炭鉱労働者たちが原発へと入つてきました。彼らは放射線防護の知識を与えられず、ノルマだけ求められました。そのため全面マスクを取つて、アラームメーターも線量の低い所に置いて働いています。そのうち病人が多発するようになつて、原発は危ないといううわさが一九七三年には広まります。

私はそういう家族の悲しみに接したことが、長年にわたり反対運動に関わる原動力になつています。電源三法交付金で恩恵を受ける人の方で、被曝した労働者の実態は闇に葬られるという構図です。巷では労働者を送り込む親方や

や公害におけるあらゆる問題に関わっていました。

つたとき、待合室で待たされたのですが、日が暮れても担当者は現れませんでした。東京電力はそういう会社です。しかし、私たちに原発の知識はなく、得られる情報は東京電力からと新聞記事くらいですから、勝負になりませんでした。

最近になつてわかったことは、一号機が多くのトラブルを抱えていて、放棄するしかない状態だったということです。緊急停止が頻発し、ピンホールは何本もありました。アメリカはトラブルを克服できない実験炉を日本に輸出したのです。稼働から三年後には松葉やほつき貝からコバルト六〇が検出されました。多くは隠されていました。

一橋大学フェアレイバ研究教育センター 連載一@

ガソリンスタンド、弁当屋、旅館・ホテルに従事する人たちが原発長者といわれました。常に二面性が存在していました。私は被害に目を向けていたので、自分のなかでぶれたという記憶はありません。

2 原発労働者の調査

一九七八年には福島第一原発で四基が動いていて、労働者の被曝線量は八〇・二人・シーベルトでした。二〇一〇年の全原発の一年分の被曝線量（八二・〇八人・シーベルト）を、当時、福島原発だけで被曝するという異常な状態でした。癌になる労働者も続出しましたが、実態はよくわかりませんでした。富岡に原発情報室という私書箱を設けましたが、相談は来ませんでした。

そこで、大阪の阪南中央病院の村田三郎先生と一緒に生活・健康・労働のアンケートを行ないました。名簿がないので、近所で働いていた人に頼み込んで紹介してもらい、そこからイモヅル式に探しました。約三〇〇人に面会し、そのうちの一〇一人から回答を得ました。

原発労働者は全国からの炭鉱離職者が多く、なかでも九州出身者が多かったです。それから東京と大阪の寄せ場の人や、刑務所にいた人ややくざの関係の事務所からの紹介者です。東京や大阪からの労働者は「やばい」という印象でした。

会いに行くと、あなた方はどの立場で来たの

かと最初に聞かれて、反対派だと言うと不思議と相手は雄弁になりました。東京電力に情報をがあったのではないかでしようか。労働者を救済するには労働実態を把握する必要があり、秘密は守ると言ふと、三人のうち一人が回答してくれました。

協力してくれた大阪の阪南中央病院はそれまでに原爆被爆者の診察をやつていて、大阪に住む被爆者のデータをもつていました。私たちの一〇一人の調査データと比較すると、その症状がよく似ていて、免疫関係への影響を受けていることがわかりました。風邪をひきやすく、目が悪く、倦怠感が強いなどの症状です。

本来、原発労働者は、働く前と三ヶ月に一回の健康診断を受けているので、健康であるはずなのに、有病率が高いわけです。全国の四〇代の労働者と原発労働者を比較すると圧倒的に被曝労働者の有病率が高く、彼らは使い捨ての状態でした。このまま働き続けたら、障害や犠牲者が出るだろうと想定しながら原発を動かしていたのです。原発は密室の故意の犯罪であると、私はそのときに強く感じました。

この調査は労働組合に関わっていた一〇人ほどで行ないましたが、財政的援助もなく非常にたいへんでした。私も若かったからできたと思います。

3 労災認定運動

最初の労災認定は、一九八八年九月に申請して一九九一年に認定を受けました。つぎの一九九九年の申請のときは、ある父親から急性白血病で死亡した息子の件での相談でした。私たちは事業主に協力を要請しました。一人親方の会社で、そこの社長と派遣先の労務担当が来て、彼らが臨界事故のような高線量被曝ではなく、低線量被曝の場合は認定の望みは薄いという話をすると、母親が激怒しました。当時の診断書は偽造が多く、健康診断で白血球が異常だったにもかかわらず働かせていましたことについて、母親が激しく叱責し、それで会社は労災申請に協力することになりました。私たちも東京電力と福島県への交渉を続けました。労災認定が認められたときに東京電力は、「本当に気の毒だったと思う。しかし、電離放射線障害防止規則に抵触せず、労災補償制度によって保護されていると理解している」と話しました。最近の東京電力は、気の毒とすら言わなくなりましたから、後退しているという印象です。

4 原発マネーの影響

1 原発依存を決断した選挙

一九七一年、岩本さんは社会党から福島県議会議員に初當選します。労働者被曝の被害状況

や地域の環境汚染について県議会で激しく追及しました。内部告発を受けて、それを議会で追及するわけです。東京電力は相当に嫌がっていました。そのためつぎの一九七五年の選挙では巻き返しを受けて落選します。

そして一九七九年に再び立候補しました。そのときはスリーマイル島原発事故の直後の選挙で、神風が吹いたと報道されました。二〇万枚ほどのちらしを撒きましたが、惨敗でした。原発ができて、交付金がおりて、町が変化を遂げていくなかで、住民が原発依存を決断した選挙だったよう思います。それ以後、原発事故や東京電力の不祥事がおきても、選挙の争点になりました。これは双葉郡だけの問題ではなく、日本の政治の断面だと思います。日々の政治課題と現実の政治が直結しないという、政治への期待感のいびつなだと感じました。

住民からは、原発がなければ昔の双葉に戻ってしまうと、よく言われました。私は、原発のない市町村が数十年前の生活をしているのか、と言い返しました。ちょっとと考えればすぐにわかるところなのに、原発立地町の人々は宣伝によるマインドコントロールで、そう思い込まれていました。

2 町の活況と衰退

岩本さんは一九八三年の県議会選挙でも惨敗をします。原発マネーで双葉郡の住民の意識は大きく変わりました。資源小国の中でも原発は

素晴らしいエネルギー源であり、原発は五つの壁に守られているから放射能漏れはないと安全性を宣伝していました。そして、反対しているのは共産党や社会党の人間だというレッテル貼りです。

東京電力や下請の人たちが地域にうまく配分されていました。彼らの多くは子どもたちのスポーツや文化活動の指導者になりました。また、その頃から原発で働く地元の人が急激に増えます。私の推計では四人に一人です。親たちは、子どもが中学校を卒業すると東京の東電学園に入学させたがりました。実際にには、議員や町長が入社のための推薦枠をもち、地域にまんべんなく振り分けていて、戦略的でした。

学校では小学校五年生になると、一人一泊五〇〇円で東京の高級ホテルに泊まって、品川の火力発電所を見学し、帰途に東京ディズニーランドで遊ぶという親子のバス旅行が組まれていました。その影響で学校教育の場で原発批判をすればすぐに問題になります。地域ぐるみの原発推進でした。

しかし、九〇年代に入るとそのたが緩んでいきます。

東京電力の財政が厳しくなり、それまで部品の買い付けはまんべんなく地域に注文していたのが、東電不動産という東京電力の一〇〇%小会社で、第二商工会と言っていた会社「アトックス」が、ホテル経営にも乗り出します。

岩本さんは、双葉町議会議長だった丸添富二さんと社会党では双璧で、二人三脚でやっていました。当時、田中清太郎という町長の不正問題があり、政治的命題を実現するためには原発反対に関わっていてはダメだと、社会党もすべて精算して、新たな路に踏み出すべきだと、その準備をしていたと理解しています。私にはなにも話はありませんでした。

当時は、岩本さんの長女が東京電力の社員と結婚したからだと言われていましたが、そんなことが理由ではないと思います。政治的な命題の達成をしたい、政治の分野で脚光をあびたい、そのためにはいま残された路は町長しかないと判断したのだと思います。

しかし、その時点では岩本さんが原発増設にま

して定期検査の短縮化や、メーカーの駐在員の削減、それにともなって旅館や下宿屋が衰退しました。栄枯盛衰が激しかった。衰退は一九九五年くらいからです。失業率の悪化は県内でも目立っていました。

3 岩本さんの転向

棚塙原発反対同盟の杵倉委員長らがやつてい

た一坪地主の呼びかけに、社会党からは私と岩本さんがなっていました。しかし、私にまつた相談もなく一坪地主の土地を返上してしまいました。そして、一九八二年に「双葉地方原発反対同盟」を辞め、一九八四年には社会党を離党しました。

岩本さんは、双葉町議会議長だった丸添富二さんと社会党では双璧で、二人三脚でやっていました。当時、田中清太郎という町長の不正問題があり、政治的命題を実現するためには原発反対に関わっていてはダメだと、社会党もすべて精算して、新たな路に踏み出すべきだと、その準備をしていたと理解しています。私にはなにも話はありませんでした。

当時は、岩本さんの長女が東京電力の社員と結婚したからだとと言われていましたが、そんな

で走るとは思っていませんでした。双葉町政の腐敗を是正して、公害のない町をめざすのだと思っていました。だから町長選のときも応援しました。

今思えば、岩本さんとは思想の基盤がまったく違いました。私は社会主義の達成のために運動をしていました。岩本さんは全日本農民組合のメンバーでもあって、農民運動に参加していました。当時の社会党福島県本部は農民運動が母体でした。彼らと当時若者だった私たちの労働運動とは、労使協調か、対立かをめぐって運動上の論争がありました。原発以外ではかみ合いませんでした。しかし、彼の「核と人間は共存できない」という思いを理解していました。

4郷土愛ゆえの転向だった？

岩本さんは原発推進側にとつて最高に利用価値の高い人です。徹底的に利用されました。岩本さんは「原子力明るい未来のエネルギー」という標語を作りました。この標語のアーチを駅前と役場前に建てました。ほかの原発立地自治体にはありません。現実的な選択をするのが政治家です。原発への徹底した依存です。

双葉は大熊とよく比較されます。電源三法交付金は二基分しかありません。事業所も大熊町にあって、固定資産税でも大きい格差があります。そこで第七・八号機を建設して、交付金を得ようとします。東京電力から三〇億円の交付を受けて資材道路をつくりました。これは大

——岩本さんの政治的転向は郷土愛からだと言
う人がいますが……。

そうとも言えるかもしませんが、現実はそんなきれいなことは済みません。後から理屈をつけることはできますが、丹念にその人の軌跡をたどると、その人が何をめざして、何をしてきたのかは明らかになると思います。

三法交付金が年々少なくなっているのに、財政規模を五年間で倍増させたことです。この発想の根源には、ポスト原発は原発以外にないという思い込みがありました。そして、二〇〇二年のひびわれ隠しや、佐藤栄佐久知事（当時）とのぶつかりがおきます。福島県原発所在町協議会は、第七・八号機と広野の火力発電所の増設とブルサーマルで、双葉を活性化させようとのめり込んでいきます。そして今日を迎えました。彼らの責任はきわめて重いと思います。いままだに町長をしている人間がいますから、何を考えているのかわかりません。

きな賭で、どうしても誘致したかったのでしょうか。ある意味、東京電力へのごますりです。

双葉町の財政が厳しくなった背景には、電源三法交付金が年々少なくなっているのに、財政規模を五年間で倍増させたことです。この発想の根源には、ポスト原発は原発以外にないとい

う。ある意味、東京電力へのごますりです。

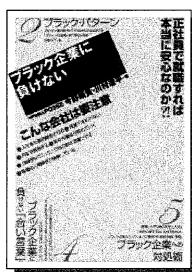
双葉町の財政が厳しくなった背景には、電源三法交付金が年々少なくなっているのに、財政規模を五年間で倍増させたことです。この発想の根源には、ポスト原発は原発以外にないとい

就活前に読む ブラック企業に負けない

ブラック企業の見分け方
就職してしまったときの
対処法が具体的に！

著者 今野晴貴
(NPO法人 POSSE 代表)
川村達平
(NPO法人 POSSE 事務局長)

定価987円(税込) A5判並製
104頁 ISBN978-4-8451-1231-9



就活前に読む 会社の現実とワークルール

弁護士が教える
会社で起こる事件の数々！
そのとき、どうする？

著者 宮里邦雄(弁護士)
川入 博(弁護士)
井上幸夫(弁護士)

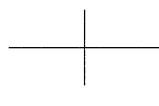
定価987円(税込) 新書判
160頁 ISBN978-4-8451-1229-6



旬報社

〒112-0015 東京都文京区目白台2-14-13
Tel: 03-3943-9911 FAX: 03-3943-8396

<http://www.junposha.com>



ち上がるしかないと主張しました。一方、岩本さんは、ポスト原発は原発以外にない。あるなら教えてほしいと訴えました。

伝え聞くところによると、三・一以後本人は、「東電のバカヤロー」と言っていたそうです。

「家に帰る」⁽⁴⁾というのが最期のことばだったそうです。私たちが岩本さんの原発推進を批判しても、ゆつたりと受け止めて、政治家としての懐の深さやパワーはすごかったです。

5 運動を継続できた理由は？

双葉郡の反原発運動は労働組合と社会党を主体にしていました。八〇年代以降、行革や民営化で三公社五現業の事業所が次々となくなり、仲間は転勤でばらばらになり、運動する人がいなくなりました。市民運動を包含した組織でないと継続は難しいです。

反対同盟は、棚塩、北棚塩、小高、双葉とあつたうち、いまもあるのは私たちと共産党系の二つの運動のみです。三・一の原発事故がなければ、棚塩・小高にも土地買収は終えていたので九九%原発は建設されていたと思います。

私が運動を続けてきたのは、東京電力の小高は反対運動を辞めようとは思いませんでした。ただ、くたびれてきて、もう限界だなと妻に言うと、「あなたは偉い」と言わされました。そう

言われると途中で投げ出すわけにいかない。理由は意外と単純です。

五 今後のJ&J

今後、原発収束作業には三〇年以上かかるでしょう。三・一以後、一年四ヵ月間で一万二二〇〇人の作業員が就労しました。スマイル島の原発収束作業では、訓練された五〇〇万人の作業員を必要としました。汚染状況からみて、現在の作業員は五〇～六〇代を中心で、仕事のない人たちの労働に頼るしかありません。廃炉作業の労働者の供給はいずれ途絶えるでしょう。福島県が発展する条件は皆無に近い。

福島県の現状や労働者の実態について全国に発信する必要があります。でたらめな東京電力はいざれ放棄するでしょう。世界的な支援を得る必要があります。一方で、現状を報告すると風評被害になるという批判の声があります。会津からが典型で、県内に論争があります。

- (1) Labor Now 脱原発ビデオ・プロジェクト
<http://nonukesfukushima.blogspot.jp/>
- (2) ビデオ『福島原発震災～被災者の声をたどる旅』
<http://nonukesfukushima.blogspot.jp/2012/05/blog-post.htm>
- (3) インタビュー記録は「福島原発震災と反原発運動の四六年～石丸小四郎さん（双葉地方原発反対同盟代表）に聞く」本誌一七五四号（二〇一二年）五〇頁以下に掲載。

<http://www.fair-labor.soc.hit-u.ac.jp/rh-junpox11025.pdf>

- (4) 岩本忠夫さんは、二〇一一年七月十五日、避難先の福島市で亡くなつた。

三・一以後、放射能に対する女性の感性は男性とはまったく違うと感じています。政治の分野で力をもつている高齢の男性は放射能に钝感です。私と佐藤和良さん（いわき市議）が福島原発告訴団の副会長になっていますが、中心は武藤類子さんという女性の団長です。原発問題を契機に、女性の政治への参加が強くなるのではないか、またそれを願っています。